



ダンスの独自性追求

音楽に合わせ、床につけた頭を軸にコマのように回転する。都内で今年1月に開催された全日本ブレイキン（ブレイクダンス）選手権。女子18歳以下の日本一を決める舞台で、身長1.50の体を目いっぱい使った回転技を次々に決め、周囲をうならせた。

結果は、目標の連覇に届かない準優勝。「苦い思い出」と振り返るが、前年覇者の地力は示した。

ブレイキンは、1970年代の米ニューヨーク貧困地区でギャング同士が音楽とダンスで対決したのがルーツとされる。現在も音楽に乗りながら、即興で踊りを見せ合う対戦形式が主流だ。東京五輪で日本選手が活躍し、注目されたスケートボードなどと同並ぶアーバン（都市型）

こてがわ ゆい か さん 19 ブレイキンでパリ五輪を目指す 小手川 結翔 さん



こてがわ・ゆいか 2003年生まれ。千葉市出身。第一学院高校卒業。母親の影響で小学校入学前からヒップホップダンスに親しんだ。日本ダンススポーツ連盟のブレイキン強化選手に指定されている。

スポーツの一つで、2024年のパリ五輪では正式競技となる。

ブレイキンを始めたのは、小学3年の時。ダンスイベントで大技を繰り出す年上の女の子に出会い、衝撃を受けたのがきっかけだ。すぐにのめり込み、難しい技を一つずつ覚えていった。持ち味は、頭や背中などを使って回転する

「パワームーブ」のキレイや美しさ。つなぎ技もおろそかにしない。

かつてはパフォーマンスが安定しなかった。何が原因か探るうちに、不安な気持ちが出た。自信あふれる演技をするために練習を重ね、積極的に「大丈夫！」と自分に何度も

言い聞かせる。「報われない努力は、まだ努力と呼べない」。そんな言葉を胸に、自分を奮い立たせてきた。

高校2年の時、ダンスのプロジェクト「Dリーグ」の公式チーム「コーセイエイトロックス」に入った。放課後に都内で練習し、終電で千葉市の自宅に帰る日々を過ごした。帰宅後に学校の課題をこな

し、睡眠時間が2時間という日もあった。

Dリーグはチーム制で、チームには世界大会で優勝した経験がある男性選手らも名を連ねていた。さらに高いレベルを目指して練習に励む必要がある、高校3年時に通信制の高校に転校した。

近くで見守ってきた母の道子さん(51)は「弱音を吐いたのを聞いたことがない」と語る。大会で思うような成績が出なかった小学生の頃からダンスのポイントをノートに書き留めていたと明かし、「目標を持って頑張ってきたことが今、結果となって表れている」と目を細める。

最大の目標はパリ五輪出場だ。そのために、「これは結翔の動きだよ」と言われるような独自性を追い求めている。出場条件など不明な点も少なくないが、「急にうまくなることは不可能。目の前にある大会を一つ一つ勝ち抜いて、準備していく」。夢の舞台に向けて、一歩ずつ歩を進めていくつもりだ。

(長岩真子)